

# 「砂に埋もれた町」説話

— その2つの系統と相互関係 —

尾 白 悠 紀

## はじめに

現在、東トルキスタンの住民の大半はムスリムである。では、当地域の人々はいつ、どのような過程を経てイスラームに改宗したのか。残念ながらこの問題については、史料がほとんど残されていない為に、未だ不明の点が多い。しかし、10～15世紀という長い時間をかけて徐々に改宗していったものと考えられている<sup>①</sup>。

では、具体的にどのような人々がどのような方法を以て、その地の住民をイスラームに改宗させていったのか。

この問題を考える上で筆者が注目するものが、16世紀の半ば、中央アジア出身のモグールの貴族ミールザー・ハイダル Mirzā Muḥammad Ḥaydar Dughlāt (1499-1551年) によって著された歴史書『ターリーヒ・ラシーディー』 *Tārīkh-i Rashīdī* (以下TR)<sup>②</sup> に見える1つの説話である。

それは、14世紀に東トルキスタン一帯を支配していた東チャガタイ・ハーン国 (モグーリスタン・ハーン国) の君主トゥグルク・ティムール・ハーン Tughluq Timūr Khān (以下、トゥグルク・ティムール)<sup>③</sup> のイスラームへの改宗譚の前半部分に登場する (本稿では、その説話を「砂に埋もれた町」説話と仮称する)。そして、それとよく類似した話は、7世紀の仏教僧、玄奘の旅をまとめた『大唐西域記』 (以下「西域記」) 内にも見え、その事実は、既にグルナールや濱田正美によって指摘されている<sup>④</sup>。さらに、この説話は上記2つの史料のみに登場するだけでなく、他にも様々な場所及び時代の史料内に散見されており、その事実は今まで部分的に紹介されて来た。

しかし、管見の限り、この説話について総合的・統一的に述べた研究は未だ存在しないと思われる。

よって本稿は、東トルキスタン住民へのイスラーム布教という問題を考察する為の前段階と

して、諸史料に見える様々な「砂に埋もれた町」説話を整理し、各々が持つ特徴とその系統をまとめ、当説話の地理的・時代的な分布とその相互関係を考察しようとするものである。

## 1. 諸史料に見える「砂に埋もれた町」説話とその系統

### 1-1. TR に記される「砂に埋もれた町」説話

TR の記述によれば、トゥグルク・ティムールは、シャイフ・ジャマルッディーン Shaykh Jamāl al-Dīn (以下、ジャマルッディーン) なる人物によってイスラームへの信仰を勧められた結果、それに改宗することを決心した。対象の説話は、その改宗を勧めたジャマルッディーンがトゥグルク・ティムールに会う前に住んでいたロブ・カタク Lop Katak <sup>⑤</sup> لوب كاتك <sup>⑥</sup> という町で起こした奇跡として登場する。著者のミールザー・ハイグルは、この話をジャマルッディーンの子孫として「クチャのホージャ Khwāja」<sup>⑦</sup> として、クチャに本拠を構えていた一族のマウラーナー・ホージャ・アフマッド Mawlānā Khwāja Aḥmad というイスラームの聖者から直接聴いたとする<sup>⑧</sup>。以下にその該当箇所を掲載する。長文である為、場面毎に区分し、要点をまとめて紹介する (全訳は巻末の〈史料全訳〉の項に掲げる)<sup>⑨</sup>。

- ① アフマッドは、自身の祖先として、最後にシャイフ・ジャマルッディーンという人物について語る。彼は、(ロブ)カタクの町<sup>⑩</sup>に居住していた。
- ② ある日、シャイフは礼拝の後、説教をし、「私は、繰り返し説教と助言をして来たが、誰も心に留めなかったようだ。故に、神はこの町にある大きな災害を送り出した。」と人々に語った。
- ③ モスクのムアッジン (礼拝の時刻を告げる人) は、シャイフが去って行くのを見かけた。彼は、シャイフの言葉を信用していたので、「私も同行させて下さい。」と懇願した。シャイフは許可し、彼もまた同行者となり、郊外までやって来た。その後、ムアッジンは用のために町へ戻る許可をシャイフから得る。
- ④ 彼は用を済ませると、最後の挨拶として就寝前に行く礼拝への呼掛けをしようと考え、モスクのミナレット (尖塔) に上り実行した。その時、彼は天から砂が町全体を完全に飲み込むように降って来るのを見た。暫く経つと、砂が積もった為に地面が近くなり、自分以外の人物は誰もいなくなっていた。彼は、砂の斜面に飛び移り、恐れ震えながらすぐに引き返した。
- ⑤ 真夜中にシャイフの許に到着すると、彼はその出来事を話した。彼らは急いで逃げた。
- ⑥ 現在、その町は砂の下にある。かつて壮麗な町であったカタクの町は今、砂の底にそのままの状態に残されている。

以上が、トゥグルク・ティムールの改宗譚前半に見える「砂に埋もれた町」説話の概要である。話はこの後、トゥグルク・ティムールとジャマルッディーンとの出会いへと続く。

では次に、グルナールや濱田によって、この物語と大変よく似ていると指摘されている『西域記』内の説話を比較のために紹介する。

## 1-2. 『西域記』に見られる「砂に埋もれた町」説話

唐の僧玄奘は、627（貞観元）年頃、インドに向かって長安を出発し、645（貞観19）年正月に長安へ帰還したとされる。問題の説話は、その帰国の旅の途中、彼が瞿薩旦那國（現在のホータン Khotan）を經由した時に、地元の人から聞いた伝説として紹介されている。以下に、場面毎に要所をまとめて掲載する。

『大唐西域記』卷第十二 瞿薩旦那國・婁摩城条 (T51: 945b-c) (原文、全訳は巻末の〈史料全訳〉の項に掲げる)

- ① 婁摩城<sup>②</sup>に仏立像が有り、甚だ靈驗あらたかである。
- ② この像について土地の者は次のように語る。この像は、私の在世に、憍賞彌國 Skt. kauśāmbī (コーシャンビー国) の鄔陀衍那 (ウダヤナ) 王によって作られ、仏滅後そこから、北の曷勞落迦<sup>③</sup> (ラウラカ) 城中に飛んで来た。しかし、この城の人はその仏像を大切にしなかった。後に1人の阿羅漢が現れ、この像を礼拝した。この国の人はその人を怪しみ、王に知らせた。王は『砂土をその者にふりかけよ』と命令した。故に、その阿羅漢は身に砂を受け、口に砂を食らい食糧を絶たれてしまった。
- ③ その時、ある者が、人々のその所業に心痛めていた。常々この像を敬っていた人で、密かに阿羅漢へ食べ物を供えた。阿羅漢は町を去ろうとし、その人に、『私が去った後の7日間、沙土が降り、この城をうずめ、ほぼ生き残っている者はいなくなるだろう。あなたは、早くここから脱出する計画を立てた方が良い。』と忠告し去った。そこで、親類などに知らせたが、誰も本気にしなかった。
- ④ 2日目になると、様々な宝物が降り、街路に満ちた。その人は阿羅漢の言葉を信じていたので、トンネルを開いて城外に出、この災難を避けた。7日目の夜半過ぎに、降った沙土は城中に満ちた。その人はトンネルから出て、東の方向のこの国に向かって行き、婁摩城に留まった。すると像もまたやって来た。そこでこの場所にて供養した。
- ⑤ 今、曷勞落迦城は大きな砂の丘陵を形成している。多くの者が発掘しその宝物を入手しようとするが、辿り着けても猛風が急に起こり煙雲が四方を取り囲み、道を見失ってしまう。

\*

以上が、玄奘の伝えるところの「砂に埋もれた町」説話の概要である。TR中の伝説と比較すると、細かな設定、進み方については、かなり違いが見られる。しかし、話の主題と登場人物の役割については、ほとんど変化していないことに気付く。すなわち、「西域記」の方が仏教を基礎にし、災害が起こるきっかけを仏像とそれを敬う阿羅漢に対する不敬に求められているのに対し、TR中の伝説はイスラームを基礎にし、災害のきっかけを神（アッラー）とその使徒であるシャイフに対する不敬に求めている。また、仏像や阿羅漢を敬う人物についても、ただの信仰者からムアッジンにその性質が変化しているものの、基本的な役割は変わっていないことが分かる。

この様に、仏教に関する伝説、或いはイスラームの聖者の奇跡譚として、『西域記』とTRの中に同種の説話が含まれていることは、実に興味深い事実であると思われる。TRが書かれたのは1540年代と考えられているから、玄奘がこの伝説をホータンの人から聴いてから、ちょうど900年のブランクがある。

これらと類似した話は、他の仏教やイスラームに関係する文献にも確認されている。

### 1-3. 「西域記」以外の仏典内に見られる「砂に埋もれた町」説話

『西域記』以外にも「砂に埋もれた町」説話は、仏典内に見られることが指摘されており、その話の起源や各々の相互関係が比較的早くから論じられてきた<sup>⑬</sup>。この説話は、仏教教団の決まりごとを規定した律の中に主に引用される。

以下に、漢訳『根本説一切有部毘奈耶』（以下「有部律」）内の該当箇所を紹介する。この史料は、唐代の僧義浄（635-713年）が671年から695年のインド巡歴の際、手に入れた梵本を帰国後、訳経したものの1つで、広くインドから中央アジアにかけて隆盛したとされる一大仏教勢力、説一切有部が伝持した律として有名なものでもある。また、漢訳とほぼ同じ内容を持つ文献資料が「チベット大蔵経」やサンスクリット断片 Gilgit Manuscripts（以下GM）に存在することでも知られる。さらに、この「有部律」は他の律典と比べ説話の数が多く、「説話の宝庫」とも形容されるものである<sup>⑭</sup>。以下に、「有部律」に見える説話を場面毎に要所をまとめて掲載する。

#### 『根本説一切有部毘奈耶』 卷第四十六 入王宮門學處第八十二之三

【あらすじ】ブッダ在世中のこと、妻の求めで出家した父仙道 Skt.rudrāyaṇa から勝音 roru-ka<sup>⑮</sup> 城の王位を譲られた項髻 Sikhaṇḍin 王は、初め、父の言い付けを守り善政を布いていたが、段々と悪政を布くようになり、それをとがめる父の代から仕えていた利益 hiru・除患 bhuru

の二大忠臣を追放し、悪大臣（佞臣）を重用するようになった。

ある時、頂髻王はその悪大臣に唆され、阿羅漢となった実の父を刺客によって殺してしまう。このことを後悔し、一度は悪大臣を遠ざけ、2人の忠臣を復帰させた王であったが、悪大臣の策略で再び彼を登用したばかりか、彼から阿羅漢などといった者たちは存在しないと思込まされてしまう。故に、王はそれまで行ってきた教団に対する食糧の布施を一切止めてしまった。

以下に掲載する本文は、それに続く箇所である。

【本文・現代日本語訳】(T23: 880b-c) (原文、全訳は巻末の〈史料全訳〉の項に掲げる)

- ① その時、多くの五衆は、<sup>②</sup>飲食が無いので皆な四散し、唯だ大迦多演那 mahākātyāyana 及び世羅 sāilā 比丘尼のみがこの城に留まっていた。
- ② ある時、比丘が朝早くに勝音城に乞食に行ったところ、頂髻王を遠くに見かけ、「王は私を見て、嫌悪感を生ぜられるかもしれない。」と考えた。故に王一行を避けて去ったのだ。王は、彼を見かけた後、悪大臣に「何故、比丘は私を見ると、去ってしまったのだ？」と尋ねた。悪大臣は、「父を殺し、罪を犯した者によって我が身に塵が降りかけられないようにしよう」と考えた為に去ってしまったのです。」と答えた。王は大いに怒り、多くの兵士に、それぞれ一握りの土を彼の上に撒かせることにした。
- ③ 比丘はこの事を知ると、すぐに小室を作り出し、中に入った。この城の人々は塵土を、その上に投げ捨て、大きな土の塊が形成された。利益・除患の二大忠臣が、それを見て土を取り除き、比丘に「この所業に対し、どのような報いを受けるか？」と尋ねた。すると比丘は「7日後に塵土が降り、あらゆる城郭が埋もれ、何も残らないだろう。」と答えた。
- ④ この日から、天は珍宝を降らし、6日目に至るまでそれを降らせた。その時、二大忠臣は、それぞれ珍宝を2隻の船に収め、夜中に城を脱出した。
- ⑤ 比丘は、7日目に塵土が降るのを見ると、城中の昔から住んでいた天女と侍者の童子と共に、空に上って去り大きな集落に至った。
- ⑥ その集落では穀場の中に落ち着いた。比丘は村に入って乞食したが、天女の天力のために穀場の穀物が自ずと満たされた。

その後、この奇跡を見た村人達によって天女は村に留まってくれるように頼まれた。彼女は比丘の為にお堂を建て、また自分にも神廟を建てて供養することを条件にその要請を受け入れた…。

\*

以上が、『有部律』内に見える該当部分の概要である。平岡聡によれば、上記に示した因縁物語は、GMには確認出来ないものの、『チベット大蔵経』にはほぼ同じ内容の話が掲載され

ているという。また、サンスクリット版の『有部律』を中心に幾つかの説話を抜き出し作成された<sup>②</sup>とされる説話集「デヴィヤ・アヴァダーナ」*Divyāvadāna*（編纂者不明、10世紀前後、西北インドにおいて編纂、以下Divy.）というサンスクリットの文献内にも、ほぼ同じ話が確認されている<sup>③</sup>。

この様に、『有部律』に挿入される「砂に埋もれた町」説話は漢訳仏典に留まらず、『チベット大蔵経』やサンスクリットの説話集内にも含まれており、『西域記』の説話と異なる箇所もあるものの、細部において類似している点もあることが確認できる<sup>④</sup>。

#### 1-4. イスラームの聖者伝 *Tadhkira* 内に見られる「砂に埋もれた町」説話

一方、TR 以外のイスラーム関連史料に見られる「砂に埋もれた町」説話については、濱田が紹介している<sup>⑤</sup>。氏によれば、この種の説話は *Tadhkira-yi Buḡrā Khānī*（以下TB）という書物のシャイフ・ジャマルッディーン *Shaykh Jamāl al-Dīn* の伝や、その息子で実際にトゥグルク・ティムールを改宗させた人物として名高いマウラーナー・アルシャッドウッディーン *Mawlānā Arshad al-Dīn* とその子孫達を主人公とした *Tadhkira-yi Mawlānā Arshiddīn Walī*（以下TMA）、*Tadhkirat al-Irshād*（以下TI）の中に見出されるという。いずれも東トルキスタンにおいてチャガタイ語で書かれた聖者伝であり、[濱田2006]にはこれら3本の校訂テキストが付されており、TMAについてはその日本語訳も掲載されている。本稿ではそのTMAの訳の該当箇所を紹介したいと考えるが、長文の為<sup>⑥</sup>、場面毎に要点を述べるに留めたい。

- ① ジャマルッディーン一行は、カタクの都に到着した。そこの人々は、ムスリムではなく拝火教徒 *gabrān* であった。
- ② 彼らは王の宮殿に赴く。王に謁見すると、イスラームに改宗することを求めた。しかし、王は承認しなかった。
- ③ 故に、ジャマルッディーンは市場に行き、高い場所に上り、大声で「今夜、この町に砂が降るぞ。我らの宗派に改宗するならば安全だが、さもなければ砂が埋めてしまうぞ。」と人々に布告した。すると15人だけが信用しムスリムとなったが、他の人々は全く信じなかった。
- ④ その夜、彼らが礼拝していた時、何人もの拝火教徒が現れ、彼らを馬鹿にし、砂を撒き散らした。すると、その拝火教徒達の腕は干乾び、目が見えなくなってしまったので、ジャマルッディーンは改宗するならば助けてやると言うが、彼らは断ってしまう。
- ⑤ また、ジャマルッディーンはある小路で夜警に出会い、捕まえられてしまう。彼は、奇跡によって彼らを倒した後、改宗した人々を隔離し、「天より砂を降らせたまえ。カタクの町を滅ぼしたまえ。神は偉大なり。」と祈願した。すると砂が降り始め、日の出

まで降り続き、この町は端から端まで砂地となった。

- ⑥ その後、ジャマルッディーンはどこに向かうべきか、聖者の靈魂にお伺いをたてた。すると預言者ムハンマドを筆頭とする7人の聖者が現れ、彼にアルダヴィール Ardāwil (アクスの雅名) の町に赴けと指示し、そこでトゥグルク・ティムールなる者がムスリムとなることを約束し、あなたの息子によって実現されるだろうとのお告げがあった…。

\*

以上がTMAに書かれる「砂に埋もれた町」の説話に当たる箇所の概要である。このTMAに引かれる話をTRのものと比較してみると、話の大筋は変わらないもののTMAの方がカタクの王への謁見などTRには見られない場面がある。この他、奇跡の起こる数が多いなど、より物語性が強調されていることに気付かされる。濱田によれば、ジャマルッディーンとその子マウラーナー・アルシャッドウッディーン父子の物語を最初に記したのはTRであり、TMAをはじめとする上に挙げた聖者伝が、これに依拠していることはほぼ間違いないという。<sup>⑩</sup>

因みに、濱田はその成立時期を、内容に1599年没の人物が登場すること、清朝が登場しないことなどの点から17世紀中に置いている。<sup>⑪</sup>

以上、TR以外のイスラーム関連史料中に見受けられる「砂に埋もれた町」説話について紹介したが、その成立にはTRの存在が大きく関わっていたことが注目される。

## 2. 「砂に埋もれた町」説話の2つの系統とその相互関係

一口に「砂に埋もれた町」説話と言っても、様々なバリエーションが存在する。それらの特徴を史料毎にまとめたのが次ページの表である。それらの説話は、仏教説話の中で扱われてきた「ロールカ都城」を舞台とした説話と、16世紀半ばのTRに端を発し、ジャマルッディーンを主人公として「カタク都城」を舞台とした説話の2系統に大きく分類出来る。そして、各々が掲載される史料の性質から、前者は「砂に埋もれた町」説話の「仏教版」、そして後者は「イスラーム版」と解釈出来る(表・4の欄参照)。

では、これら2系統の説話の間には、何らかの関係があるのだろうか。この点に関して、濱田はTR中の「砂に埋もれた町」説話は、『西域記』の話のイスラーム版であり、ローランの古代の記憶を伝えた伝説が、長期間、ホータンの地域に残っており、やがてイスラーム用に脚色されたのであろうと述べる。<sup>⑫</sup>

確かに「ロールカ都城」説話は、土地の者から直接聴取したという玄奘の記録から7世紀前半には、少なくともタリム盆地のホータン周辺の人々によって知られていた可能性が指摘出来る。<sup>⑬</sup>

各史料に見える「砂に埋もれた町」説話・対照表

		「西域記」	「有部律」類	TR	TMA
1	史料の記述・編纂された年代 or 説話が聴取された年代	640年頃、玄奘によって聴取される	漢訳の元となったサンスクリット原本：600年代後半に入手 チベット語：8世紀以後訳出 Divy.：10世紀前後編纂	1540年代に記述	17世紀に記述
2	各史料の関係する地域	瞿薩旦那(ホータン)國の婁摩城(タリム盆地南縁)	インド・ガンジス流域 チベット 西北インド	東トルキスタン	
3	説話の典拠	玄奘が瞿薩旦那(ホータン)國の婁摩城にて地元の者から聴取	不明	著者のミールザー・ハイダルがマウラーナー・ホージャ・アフマッドより聴取	TRの話を元にかかれる
4	説話の系統	ロールカ都城説話<仏教版>		カタク都城説話<イスラーム版>	
5	砂が降ることを予告する人物	1人の阿羅漢	1人の比丘	ジャマルッディーン	
6	5の信仰対象	仏像	特に無し(しかし、町を脱出する時にその町の天女と共に逃げる)	神(アッラー)	
7	5の人物に対し砂を撒かせる場面の有無	○	○	×	○
8	5の人物が、町に砂が降ることを知らせる対象	仏像と阿羅漢を信仰する一人物	2人の忠大臣	町の一般大衆	
9	忠告を聞き命助かる人物	〃	〃	ムアッジン	15人のイスラーム改宗者
10	砂が降るまでの日にち	7日後(砂が降るまでは様々な宝物が降る)		ジャマルッディーンが予告をしたその晩	
11	忠告を聞いた人物の町からの脱出方法	トンネルを掘ってそれを伝い脱出	漢訳には無いが、チベット語訳やDivy.には、地下水路を掘り、それを船で伝い脱出する	ジャマルッディーンと共に逃げる	本文では紹介していないが、牛の群れを高い糸杉に繋ぎ、夜が明けるまで追い立てる方法で助かる
12	今現在の町の様子を描写した場面の有無	○	×(砂に埋もれた町の具体的な描写は無いが、共に逃げた天女が辿り着いた集落で祀られたという後日談は「西域記」と類似)	○	×

また、TRの「カタク都城」を舞台とした説話は、ハイダルがTRを記述した年代(1540年代)と東トルキスタンにイスラームが広まっていった時期(10~15世紀)とを考慮すると、仏教版の「ロールカ都城」説話よりも遅れて登場したことはほぼ間違いない。故に、濱田の指摘はほぼ間違い無いと思われる。

しかし、上述したように、義浄は674年から685年まで滞在したインド・ガンジス流域の寺院



において、漢訳『有部律』の元となった梵本を手に入れたとされていることから、7世紀の後半には、既にホータン周辺に限らず、インドの一部でも当説話が知られていた可能性がある。そして、『チベット大蔵経』や Divy. 内の同類説話の存在から10世紀頃には、かなり広い地域で流布していたと考えられる（表・1, 2の欄参照）。故に、TR中の「砂に埋もれた町」説話は、必ずしも、ホータンの地域に残っていた伝説をイスラーム用に脚色したものとは言えず、この点については、筆者は濱田の意見に反対である。

では、イスラーム版の「カタク都城」説話は、仏教版の「ロールカ都城」説話を直接、参考にしたと考えることは可能であろうか。

もし、TRにおいてこの話を語ったマウラーナー・ホージャ・アフマッドが『西域記』などを直接、参考としていたならば、TRも「ロールカ都城」を舞台とした説話（「ロールカ都城」説話系統）になっていて然るべきであろう。このことから、筆者は、イスラーム版の「カタク都城」説話が仏教版の「ロールカ都城」説話を直接利用、改造したというよりも、両説話が参考としたこれらの説話の原型となる話が、かなり広範囲に長期間に渡って存在していたのではないかと考える。

表の7の欄は、説話中において砂が降ってくることを予告した人物に砂をかける場面の有無を示しているが、『西域記』、『有部律』類、そしてTMAにはその場面が存在するにも拘らず、TRにだけ見られない。これは少し不思議に思われる。何故ならば、TRには見られないのに、それを基にして書かれたとされるTMAにはその記述が見られるからである。

このことから濱田は、TMAが書かれた17世紀にもこの説話に関するオーラルな伝承がタリム盆地を中心とした地域に残っていたのではないかとする。筆者も、これこそ「砂に埋もれた町」説話の原型が存在していた証拠であると考え。つまり、原型となる話が、古くは7世紀の昔から、タリム盆地やインドのガンジス流域といったアジア各地で流布しており、仏教やイスラームといった宗教教団はそれを取り込み、それを基礎としながらも、自らの都合の良い風に作り変えたのではないだろうか。

しかし、原型と考えられる話が元々どの伝説であったのか不明であるばかりか、その原型と考えられる伝説自体がそもそも発見されていない事から、あくまでもこの考えは推測の域を出ない。

また、イスラーム側の「カタク都城」説話が仏教側の「ロールカ都城」説話を直接、利用したという可能性も完全には否定出来ないと考える。ともあれ、各時代・各地域の史料に同類の話が現に存在している以上、やはりモチーフとなった話が人々の間で伝えられていたことは十分に考えられる。

## おわりに

本稿にて筆者が述べたことを以下に簡略にまとめる。

- ① TRに見られる「砂に埋もれた町」説話の類似説話として、筆者は仏教文献である『西域記』と『有部律』の一説話、そして、イスラーム文献タズキラに見られるものの代表としてTMAの一説話を紹介した。そして、それらの話を、舞台となっている町の名称の違いから、「ロールカ都城」説話と「カタク都城」説話の2つの系統に分類した。そして、各々が掲載される史料の性質から、前者は「砂に埋もれた町」説話の「仏教版」、そして後者はその「イスラーム版」とした。
  - ② 続いて筆者は、これら2系統の説話のうち、どちらが先に登場したかという点について検証し、仏教版の「ロールカ都城」説話が、イスラーム版の「カタク都城」よりも早く登場したという結論に達した。故に、その点では、TR中の「砂に埋もれた町」説話は、『西域記』の話のイスラーム版であり、ローランの古代の記憶を伝えた伝説が、長期間、ホータンの地域に残っており、やがてイスラーム用に脚色されたのであろうという濱田の指摘には概ね賛成である。
  - ③ しかし、漢訳『有部律』の元となった梵本は、義浄がインド・ガンジス流域の寺院において手に入れたとされていること、そして『チベット大蔵経』やDivy.内にも同類説話が見られるという仏教学の研究から、「砂に埋もれた町」説話は、必ずしもホータン地域のみのものでない伝説とは言えず、かなり広い地域で流布していたと推測出来る。よって、濱田が言うように、TR中の「砂に埋もれた町」説話が、長期間、ホータンの地域のみに残っていた伝説をイスラーム用に脚色したものという点については、異を唱える。
  - ④ 最後に筆者は、イスラーム版の「カタク都城」説話が仏教版の「ロールカ都城」説話を直接手本として利用したと考えることは可能かという問題について取り上げた。しかし、今のところその証拠は無い。もし、TRにおいてこの話を語ったマウラーナー・ホージャ・アフマッドが仏教に伝えられたものを参考としていたならば、TRも「ロールカ都城」を舞台とした説話（「ロールカ都城」説話系統）になっていて然るべきではないか。このことから、筆者は、イスラーム版の「カタク都城」説話が仏教版の「ロールカ都城」を直接利用、改造したというよりも、両説話が参考としたこれらの説話の原型となる話が、広い地域に長期間に亘って存在していたのではないかと考えた。つまり、原型となる話が、古くは7世紀の昔から、タリム盆地やインドのガンジス流域といったアジア各地で流布しており、仏教やイスラームといった宗教教団はそれを取り込み、利用したのではないか。
- この様に、何百年にも亘ってアジア各地で伝承され続けた当説話は、各時代に繁栄した宗教

教団と少なからず関係を持っていた。

このうち、筆者は自身の研究テーマの関係から、特にイスラーム教団がどのような目的で、当説話を利用したのかという点に強い関心を抱いている。彼らは、その布教の一環として、古くから各地に伝わり、地元の人々に馴染みがあった伝説を自らの都合の良いように改造し、利用しようとしたのではないか。しかし、この仮説を実証するには、未だ例が少なく、確かな証拠も見付けられていない。よって、この問題については、今後の研究課題としたい。

〈史料全訳〉

#### ◆ TR に記される「砂に埋もれた町」説話全訳

…彼ら（アフマッドが語った彼の祖先たち）の最後の人物はシャイフ・ジャマールッディーン Shaykh Jamāl al-Din [という名 Thacks./None; Teh./ نام] であった。彼は内面的な神秘的な能力の持ち主で（神との合一で得られる）強い恍惚感を体験した人物であり、カタク Katak [の町 Thacks./ شهر; Teh./None] に居住していた。

ある金曜日、そのお方は礼拝の後に説教をなされ、人々に次のように話した。「私は、[これまで Thacks./ ازین; Teh./ از این] 繰り返し説教と助言をして来たが、誰もそれを心に留めなかったようだ。今、神一高められ讃えられんことを一が、[この町にある大きな災害を送り出した Thacks./ فرستاده است مر این شهر را; Teh./ بلایی عظیم فرستادست مرین شهر را] ということが私に明らかとなった。私は、この災難から逃亡し、命が救われるよう命じられ、そうすることが許されている。(よって) これがあなた方にする私の最後の説教である。私はあなた方に退去の許しを乞い、[別れの挨拶 Thacks./ خیر باد; Teh./ خیر یاد] をする。次に会う時は、最後の審判においてであろう」と。(そして) [シャイフは説教壇より降りた Thacks./ شیخ از منبر فرود آمد; Teh./ شیخ از منبر فرود آمدند]。

モスクのムアッジン（礼拝の時刻を告げる人）がやって来て、彼（シャイフ）が去って行くのを見た。彼（ムアッジン）は、シャイフの言葉を [また/すっかり Thacks./ هم; Teh./ تمام] 信用していたので、(シャイフに追い付き、彼に)「私も同行させて下さい」と懇願した。シャイフはおっしゃった。「[よろしい Thacks./ خوب باشد; Teh./ بسیار خوب باشد]。」(故に) ムアッジンもまた同行者となり、町から3ファルサフ（約18km）(の地点)に御到着なされた。(その後) ムアッジンは、ある重要な用のために町へ戻る許可を（シャイフから）得た。

彼は町に戻り、その [自身の Thacks./ خود; Teh./None] 用事が済むと、再びシャイフの方に向かって出発した。金曜日モスクに到着した時、彼は最後の別れの挨拶として、就寝前に行う礼拝の呼掛け（※礼拝の時刻を告げる時に発する呼び掛け・アザーン adhān）をしようと考えた。(そして) モスクのミナレットに上り、就寝前に行う礼拝の呼掛けを [行った Thacks./

بگفت; Teh./گفت}。〔その祈り/アザーン Thacks./ نماز آن ; Teh./ اذان 〕をしている時に、彼は、天から何か降って来るのを見た。(それは) 雪のようであった。しかし、乾燥していた。彼は、アザーンを言いながらしばらく立ち続け、礼拝を済ませると、(ミナレットを) 降りた。(すると) モスクに出る戸が堅く閉ざされていた。(外に出るために) 通り抜けられる所が見つからなかったため、彼はミナレットに上った。(そして) 見わたすと、彼は、砂がまるで町全体を〔完全に Thacks./ تمام ; Teh./ None 〕飲み込むように降っているのを見た。しばらく経つと、地面が近くなっているのを見た。注意して見てみると、人物としては〔唯一 Thacks./ يك ; Teh./ None 〕、彼だけが残っていた。彼は、(砂の) 斜面に飛び移り、恐れ震えながら(すぐさま) 出発した。

真夜中にシャイフの〔許に Thacks./ به; Teh./ پیش 〕到着すると、彼は(その) 出来事を話した。シャイフは直ちに出発し、言った。「〔全能にして至高なる Thacks./ تعالی که قهار است ; Teh./ None 〕神の怒りから、離れた方が良い。」彼らは急いで逃げた。

現在、その町は砂の下にある。時々、風が砂を運び去り、ミナレットの先端や丸屋根の頂部が現れる。強い風が家々を再び出現させた時に、人々は(その) 家の内部に進入したが、家具の全てが立ったままであり、家の主人は白い骨となってしまっているのを発見した。(その) 家の内部や無生物のものは1つの損失も無く、立ったままである(のを見かける)。要するに、(かつて) 壮麗な町であったカタクの町は(今)、砂の底にそのままの状態に残されているのである。…

\*

◆「大唐西域記」卷第十二 瞿薩旦那國・婁摩城条 (T51: 945b-c)

【原文】戦地東行三十餘里至婁摩城。有彫檀立佛像。高二丈餘、甚多靈應、時燭光明。凡有疾病隨其痛處、金薄帖像即時痊愈。虚心請願多亦遂求。

聞之土俗曰、「此像昔佛在世、憍賞彌國鄔陀衍那王所作也。佛去世後、自彼凌空至此國北曷勞落迦城中。初到此城人安樂富饒、深著邪見而不珍敬。傳其自來神而不貴。後有羅漢禮拜此像。國人驚駭異其容服、馳以白王。王乃下令、「宜以沙土塗此異人。」時阿羅漢身蒙沙土闕口絕糧。

時有一人心甚不忍。昔常恭敬尊禮此像。及見羅漢密以饌之。羅漢將去謂其人曰、「却後七日、當雨沙土、填滿此城略無遺類。爾宜知之早圖出計。猶其塗我獲斯殃耳。」語已便去忽然不見。其人入城具告親故、或有聞者莫不嗤笑。

至第二日大風忽發吹去穢壤、雨雜寶滿衢路。人更罵所告者、此人心知必然、竊開孔道出城外而穴之。第七日夜宵分之後、雨沙土滿城中。其人從孔道出、東趣此國止婁摩城。其人纔至其像亦來。即此供養不敢遷移。聞諸先記曰、「釋迦法盡像入龍宮。」

今曷勞落迦城爲大堆阜。諸國君王、異方豪右、多欲發掘取其寶物、適至其側、猛風暴發、煙

雲四合。道路迷失。

【訳文】戦地から東へ行くこと30里余りで婁摩城に至る。白檀を彫刻した仏立像が有る。高さは2丈余りで、甚だ靈驗あらたかで、時に光明を灯す。全般的に疾病が有れば、その痛む箇所に従って、金薄を像に貼り付ければ、即時に回復する。心を空にして請願すれば、多くまた願いを成し遂げることが出来る。

この像について土地の者に聞くところによれば、次の如くである。「この像は昔、仏の在世に、橋賞彌國（コーシャンピー国）の鄔陀衍那（ウダヤナ）王によって作られた。仏が世を去った後、彼方から空を越えて、この国の北の曷勞落迦（ラウラカ）城中にやって来た。最初に至ったこの城の人は、富裕で安楽に暮らしており、深く邪見を表に出し、（その仏像を）大切にしなかった。その自らが来たこと（由来）を伝えても、神として尊ばなかった。後に（1人の）羅漢が現れ、この像を礼拝した。（この）国の人はその態度や服装を怪しみ、驚き恐れ、馳せて行って（そのことを）王に申し上げた。王はそこで、『砂土をその変わった者にふりかけるように』という命令を下した。それで、その阿羅漢は身に砂を受け、口に（砂土を）食らい食糧を絶たれてしまった。

その時、ある1人の者がいて、（人々のその所業に）心痛めていた。以前から常々恭しくし、この像を尊び敬っていた。羅漢を見ると、密かにその人に食べ物を供えた。羅漢は（その街を）去ろうとし、その人に次の如く語った。『（私が）去った後の7日間、沙土が降り、この城をうずめ満たし、ほぼ生き残っている人々はいなくなるでしょう。あなたは、このことを知り、早く（この町から）脱出する計画を立てた方が良い。皆、私に（砂を）ふりかけた者たちは、この災難を受けるでしょう』と。語り終わると、すぐに去り忽ち姿見えなくなった。その人は城に入って、詳しく親類の者となじみの者に知らせた。中には聞く者もいたが、嘲り笑わない者はいなかった。

2日目になると、大風が突然起こり、穢れた土壤を吹き去り、様々な宝物を降らせ、街路に満たした。人々は、いよいよ（その情報を）知らせた者を罵ったが、この人は心の中で必ずその通りになると認め、人知れずトンネルを開いて城外に出て、この災難を避けた。7日目の夜半過ぎに、降った沙土は城中に満ちた。その人はトンネルから出て、東の方向のこの国に向かって行き、婁摩城に留まった。その人がやっと到着すると、その像もまたやって来た。そこで、この場所に供養し、敢えて移すようなことはしなかった。色々な古い記録には、『釈迦の法が尽きれば、像は龍宮に入る』とあると言う。

今、曷勞落迦城は大きな（砂の）丘陵を形成している。諸国の君主や諸方の豪族たちの多くは、発掘しその宝物を手に入れようと欲するが、行って（幸運にも）その側に至ったとしても、猛風が急に起こり、煙雲が四方を取り囲み、道を見失ってしまう」と。

\*

## ◆「根本説一切有部毘奈耶」卷第四十六 入王宮門學處第八十二之三 (T23: 880b-c)

【原文】…時諸五眾、即無飲食、並皆四散唯大迦多演那及世羅苾芻尼、於此城住。時迦多演那苾芻、於晨朝時執持衣鉢、入勝音城欲行乞食、逢頂髻王出外遊獵。尊者見王便生是念、「或王見我生不喜心。」避之而去。王逢見已問佞臣曰、「何故苾芻遠相避去。」佞臣答曰、「彼苾芻作是念。『勿令殺父作逆之人塵觸我身。』爲斯遠去。」王聞大怒勅諸兵士、各以土一把散苾芻上。時彼尊者知是事已、即便化作小室在中端坐。彼諸人眾各以塵土、棄尊者上便成大聚。時利益・除患二大忠臣、見其非理便爲去土、問言、「大德、今此城人、作無利事。當受何報。」苾芻報曰、「齊七日來當雨塵土、所有城郭墳塹無遺。」…(中略)…即於是日天雨珍寶、乃至六日皆雨珍寶。時彼利益・除患二大忠臣、各收珍寶盛滿二船、於其夜中出城逃避。…(中略)…尊者大迦多演那、於第七日於此城中見雨塵土、知是業力不可救濟、即與勝音城中舊住天女并侍者童子、見土滿城人無遺子、乘空而去至大聚落。止穀場中暫時停息。整理衣鉢入村乞食、由天力故場中稻穀自然盈滿。…

【訳文】…その時、多くの五衆は、既に飲食が無いので、共に皆な四散し唯だ大迦多演那 Skt. mahākātyāyana 及び世羅 śailā 比丘尼のみがこの城に留まっていた。

ある時、迦多演那比丘が朝早くに衣鉢を持って勝音城に入り、乞食を行おうとしたところ、頂髻王が外出して狩りに行くのに遭遇した。尊者は王を見て、すぐに次のような考えが(心の中に)生まれた。「ひょっとすると王は私を見て、嫌悪感を生ぜられるかもしれない」と。(そこで)王一行を避けて去ったのだった。王は(彼を)見かけた後、邪な大臣に尋ねて言った。「何故、比丘は遠くから(私を)見ると、避けて去ってしまったのだ？」と。邪な大臣は答えて言った。「かの比丘はこのような考えを(心に)起こしたのです。『父を殺し、罪を犯した者によって我が身に塵が降りかけられないようにしよう』と。この為に遠く去ったのです」と。王は(この話を)聞いて大いに怒り、多くの兵士に勅して、それぞれ一握りの土を(その)比丘の上に振りまかせようとした。

折しも、かの尊者はこの事を知ると、そこですぐさま小室を作り出し、中に入って正座した。(この城の)多くの人々はそれぞれ塵土を、尊者の上に投げ捨て、すぐに大きな(土の)塊が形成された。ちょうどその時、利益・除患の二大忠臣が、その非道理(な行い)を見てすぐに(比丘の)ために土を取り除き、尋ねて言った。「大徳よ。今、この城の人は、利の無き事を仕出かしました。一体、どのような報いを受けるのでしょうか？」と。比丘は答えて言った。「(今日から)ちょうど7日後、塵土が降り、(それによって)あらゆる城郭が埋もれてしまい、何も残らないでしょう」と。…(中略)…

まさしくこの日から、天は珍宝を降らし、まさに6日目に至るまで毎日、珍宝を降らせた。

その時、かの利益・除患の二大忠臣は、それぞれ珍宝を2隻の船に収めいっばいにし、その夜中に城を脱出した。… (中略) …

尊者大迦多演那は、7日目にこの城中に塵土が降るのを見ると、これは業力にて救済出来ないことを悟り、直ちに城中の昔から住んでいた天女と侍者の童子と共に、土が城を満たし、人はわずかな生き残りも無いのを見て、空に上って去り大きな集落に至った。

(その集落の) 穀場の中に落ち着き、暫く留まり休んでいた。(比丘は) 衣鉢を整理し村に入って乞食したが、天力(天女の威神力)の為に場中の穀物が自ずと満たされた。…

#### <主要参考文献>

- 榎本文雄 1998 「『根本説一切有部』と『説一切有部』」『印度學佛教學研究』47-1 pp.111-119
- 杉山正明・北川誠一 1997 『大モンゴルの時代』(世界の歴史9) 中央公論社
- 西本龍山 訳 / 竹村牧男 校訂 1933a 『国譯一切經』律部19 大東出版社  
1933b 『国譯一切經』律部21 大東出版社
- 羽浜了諦 1971 「西域に於いて創作された譬喩譚」『羽浜了諦博士米寿祝賀記念仏教論説選集』大東出版社 pp.667-679
- 羽田 明 1982 「17—18世紀の東トルキスタン」『中央アジア史研究』臨川書店 pp.3-48 (初出『東洋史研究』7-5 1942)
- 濱田正美 2006 『東トルキスタン・チャガタイ語聖者伝の研究』ユーラシア古語文献研究叢書4 京都大学大学院文学研究科
- 2008 『中央アジアのイスラーム』世界史リブレット70 山川出版社
- 平岡 聡 1995 「『ディヴィヤ・アヴァダーナ』と根本説一切有部毘奈耶」『佛教文化研究』40 pp.9-22
- 2002 『説話の考古学 —インド仏教説話に秘められた思想』大蔵出版
- 2007a 『ブッダが謎解く三世の物語—『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』上 大蔵出版
- 2007b 『ブッダが謎解く三世の物語—『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』下 大蔵出版
- 平川 彰 1999 『律蔵の研究I』平川彰著作集第9巻 春秋社
- 間野英二 2001 「『パーブル・ナーマ』と『ターリーヒ・ラシーディー』—その相互関係—」『パーブル・ナーマの研究IV 研究篇 パーブルとその時代』松香堂 pp.134-143 (初出:『西南アジア研究』34, 1991年)
- 2004 『テュルク・イスラーム時代の中央アジア —テュルク化とイスラーム化』『中央アジアの歴史・社会・文化』放送大学教育振興会 pp.60-82
- 水谷真成 訳註 1971 『大唐西域記』中国古典文学大系22 平凡社
- 宮林昭彦・加藤栄司 訳 2004 『現代語訳 南海寄帰内法伝 —七世紀インド仏教僧伽の日常生活—』法蔵館
- 渡邊照宏 1964 「Udāyaṇa 王と Rudrāyaṇa 王」『干潟博士古稀記念論文集』pp.81-95

## 【欧文文献】

- 'Abbāsqli Ghaffāri Fard ed. 2004 *Tārkh-i Rashīdī*, Tehran (略号 Teh.)
- Elias, N. ed./ Ross, E. D. tr. 2005 *The Tarikh-i-Rashidi of Mirza Muhammad Haidar, Dughlat. A History of the Moghuls of Central Asia: An English Version*, Adamant Media Corporation, repr. of the edition published in 1895.
- Grenard, F. 1898 *Le Turkestan et Tibet, Étude Ethnographique et Sociologique, Mission Scientifique dans la Haute Asie 1890-1895*; pt. 2, Paris: Ernest Leroux
- Hamada, M. 1978 "Islamic Saints and Their Mausoleums." *Acta Ajiatica*, No. 34, pp. 79-98
- Nobel, J. 1955a *Udrāyāna, König von Roruka: Eine Buddhistische Erzählung: Die Tibetische Übersetzung des Sanskrittextes*, I: Text, Deutsche Übersetzung und Anmerkungen, Wiesbaden: Otto Harrassowitz
- 1955b *Udrāyāna, König von Roruka: Eine Buddhistische Erzählung: Die Tibetische Übersetzung des Sanskrittextes*, II: Wörterbuch, Wiesbaden: Otto Harrassowitz
- Stein, A. 1921 *Serindia: Detailed Report of Explorations in Central Asia and Westernmost China*, vol. 1, Oxford
- Thackston, W. H. 1996a *Mirza Haydar Dughlat's Tarikh-i-Rashidi: A History of the Khans of Moghulistan*. Persian Text, Harvard University Department of Near Eastern Languages and Civilizations (略号 Thacks.)
- 1996b *Mirza Haydar Dughlat's Tarikh-i-Rashidi: A History of the Khans of Moghulistan*. English Translation & Annotation, Harvard University Department of Near Eastern Languages and Civilizations

## 註

- ① 羽田1982；間野2004：78-81
- ② 第1部「本史」と第2部「簡史」から成る。[間野2001：134，注2]によると、第1部の序文の書かれた年はAH951/ AD1544-45年、完成したのは952年ズール・ヒッジャ月末日（1546年3月3日）であり（※953/1546-47年に追加した部分あり）、第2部は948/1541-42年と950/1543年の間に書かれたという。
- ③ 在位1347/8-62/3年。1361年、モグーリスターンのハーンにして、東西に分立していたチャカタイ・ハーン国を久方ぶりに統一した人物。また、モグールの君主として初めてイスラームに改宗したことで有名。
- ④ Grenard1898: 240-241; Hamada1978: 82-83
- ⑤ Thacks.: 10-13; Teh.: 17-23
- ⑥ スタインによれば、Katakは「枯れた木」を意味する kötek という言葉に由来し、kötek shahriとあれば、それは「沙漠の荒廃した都市」を意味するという（shahrはペルシア語で「都市」の意）[Stein1921: 320, n. 12, 454, n. 10]。このことから濱田は、もしTRのLop Katakが「LopのKatak」、つまり「Lopの荒廃した町」と理解できるのであれば、それはローランLoulanの遠い記憶の名残なのではないかとする [Hamada1978: 81, n. 6]。
- ⑦ ホージャは、元来は貴人を意味するペルシア語。イスラーム世界の諸地域で、一般に、先生、師、主人、宦官、大商人等の意で用いられる。12世紀以後の中央アジアでは、後にナクシュバンディー教団Naqshbandiyaと呼ばれるイスラーム神秘主義者たちの一派がホージャ派と呼ばれた。



(平凡社『新イスラム事典』2002年：ホジャ、間野英二執筆を筆者要約)。

- ⑧ Thacks.: 10, 1.12 ; Teh.: 18, 1.6
- ⑨ テキストは校訂本としては [Thacks.: 10, 1.19-11, 1.14] と [Teh.: 18, 1.13-19, 1.18]、写本は British Library Add. 24,090及び Akademiya Nauk SSSR (Institut Vostokovedeniya) B648、英訳として [Elias & Ross 2005: 10-11], [Thackston1996b: 8-9] 参照。
- ⑩ 原文のこの箇所では Lop Katak の Lop の部分が省略されている。
- ⑪ 『大正新脩大蔵経』
- ⑫ 現在の和田地区策勒 Chira 県の県治北の沙漠中に位置する Ulūgh- Ziārat の地域に比定される [水谷1971: 405, 注1]。
- ⑬ Skt.\**rauraka* (コートン語 *raurata*) の音写と思われる、Kroraina すなわち楼蘭 Loulan を指すという考えがある [水谷1971: 406, 注3 ; Hamada1978: 83]。
- ⑭ 同じく『大唐西域記』巻第五・憍賞彌國条にこの王と彼の作った仏像についての言及があるが、ここで語られている様に像が空を越えて曷勞落迦城にまで行ったという話については語られていない。
- ⑮ 註②参照
- ⑯ 渡邊1964 ; 羽溪1971 ; 水谷1971: 406, 注3 ; 平岡2002: 73-75 ; 平岡2007b: 514,536-540
- ⑰ 渡邊1964 ; 羽溪1971
- ⑱ N.Dutt ed. *Gilgit Manuscripts*, 4 vols., Calcutta, 1939-1959
- ⑲ 西本1933a: 3-4 ; 榎本1998: 111 ; 平川1999: 72-78,100-104 ; 平岡2007a: ii
- ⑳ 羽溪によれば、この地名は、パーリ仏典「長部」中にブツ出世以前のインド7大都市の1つとして登場するという。しかし、氏はどこに出てくる Roruka は、パミール以東にあったとする [羽溪1971: 673-674]。
- ㉑ 比丘、比丘尼、沙弥、式叉摩那、沙弥尼
- ㉒ [平岡2002 : 74 ; 平岡2007b : 514]。尚、チベット語テキストについては、[Nobel 1955a] のドイツ語訳と [Nobel 1955b] の単語帳が刊行されている。
- ㉓ 平岡1995 ; 平岡2002: 116-151
- ㉔ 平岡2002: 136-141,149-151 ; 平岡2007a: iii
- ㉕ [渡邊1964 ; 羽溪1971 ; 水谷1971: 406, 注3]。Divy. の日本語訳 [平岡2007b] を参照すると、漢訳『有部律』と登場人物をはじめ、話の展開の仕方に至るまでほとんど同じであり、Divy. の編纂者がサンスクリット版の『有部律』を参考として編纂したという平岡の説は十分説得力に富む。ただ、Divy. には、ところどころ漢訳『有部律』には書かれぬ箇所が見られる。故に、漢訳『有部律』はかなり脱落部分が多い構成となっていることが分かる。
- ㉖ [渡邊1964] によれば、この他の仏典内にも同じような話は見受けられるらしく、さらにはジャイナ教の史料にも実によく似た説話が語られているという。確かによく類似しているようで大変興味深い。現時点ではここで言及しておくに留める。
- ㉗ 濱田2006
- ㉘ 同: 16-19
- ㉙ 同: 32-42
- ㉚ [同: 15]。また濱田は、TMA は TB をも参照して書かれた可能性があると指摘している。
- ㉛ 同: 20
- ㉜ Hamada1978: 83
- ㉝ さらに、玄奘が婁摩城で見たという仏像については、『洛陽伽藍記』巻5所収の『宋雲行記』(6

世紀前半)にも記述があり [T51: 1058c-1059a; 羽溪1971: 677; 水谷1971: 405-406, 注2]、その仏像と共に姚秦の年号が記された幡を目撃したとあることから、恐らく姚秦の時代(384-417年)以前には、既にこの話の大筋は成立していたのではないかという意見も存在する [羽溪1971: 677]。しかし、幡があったからといって、それが奉納された当時から当説話が存在したとは限らない為、筆者はこの意見には賛成しかねる。ただ、宋雲は、その仏像が南方より空を飛んでやって来たという父老の話を記録しており、少なくとも6世紀前半には、「砂に埋もれた町」説話の一部となる話がこの地域に存在していたことだけは確実であると考ええる。

- ③④ 宮林・加藤訳2004: 446-447
- ③⑤ 西本1933a: 4
- ③⑥ 羽溪は、当説話の一場面が、トルファンやクチャの仏教石窟の壁画に見出されていることを指摘しており、このことから氏は、この話がタリム盆地一帯で流行していたと述べる [羽溪1971: 678]。
- ③⑦ この意見については、濱田先生より御教示いただいた。
- ③⑧ 羽溪は *Divy.* に含まれる当説話部分の記述から、当説話の舞台となったロールカの都城は、タリム盆地にあったに相違なく、よってこの説話もそこで生まれたとする。故に、「有部律」の原本がインドで編集されたとするならば、その話は、中央アジアからインドへ逆輸入されたと述べる [羽溪1971: 674-678]。また、渡邊照宏は、玄奘の伝える説話は、ジャイナ教の伝説とも共通するインドの著名な昔物語をコータン地方の廃墟に転用したものと述べる [渡邊1964: 90-91]。
- ③⑨ 今回取り上げた説話の他にも、古くからの話がイスラームに脚色され伝えられた事例は [杉山・北川1997: 399-422; 濱田2008: 46-55] に幾つか指摘されている。